

20 歳からの体重減少と自殺死亡リスクとの関連に関するコホート研究

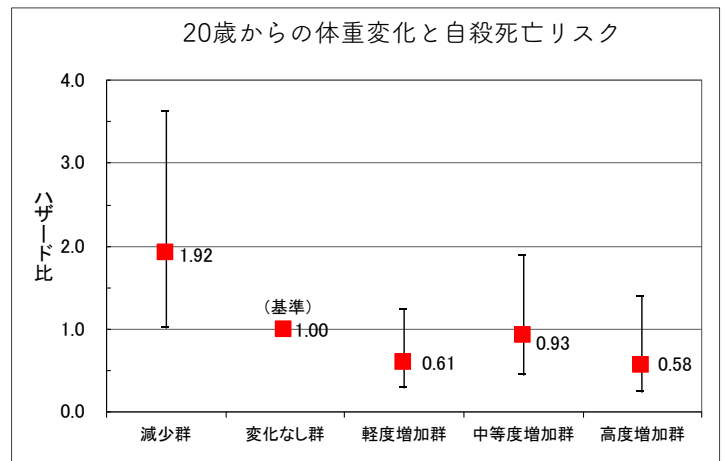
Association between weight loss since the age of 20 years and the risk of suicide death:

A population-based cohort study

2021 年 Journal of Affective Disorders 発表

20 歳からの体重が5%以上減少している人では自殺死亡リスクが有意に高い

これまで行われてきた BMI（Body mass index；体格指数）と自殺死亡リスクの研究では、BMI が高いほど自殺死亡リスクは低く、BMI が低いほど自殺死亡リスクが高いと報告されてきました。しかし、これまでの報告では、ある時点での体重とその後の自殺死亡リスクとの関連を調べたもので、長期間にわたる体重変化が自殺死亡リスクと関連しているかについては、よく分かっておりませんでした。そこで、40 歳以上の方を対象とした前向きコホート研究にて、20 歳からの体重変化と自殺死亡リスクの関連について検討を行いました。その結果、20 歳から体重が 5% 以上減少している人は、体重変化が±5%の人に比べてその後の自殺死亡リスクが高いことが分かりました。一方で、体重変化が 5%以上増加している人では、統計学的な有意差は認めませんでした。自殺死亡リスクが低下する傾向がありました(図)。



研究のデータについて

本研究は、2006 年 12 月に実施した大崎市民健康調査のデータを用いて分析を行いました。大崎市民健康調査は調査開始時点で 40 歳以上であった住民 77,235 名を対象にアンケート調査を実施し、49,603 名から有効回答を得ました。本研究ではこのうち、調査開始以前に転出または死亡された方、調査開始時点・調査開始 1 年前・20 歳時点の体重についての回答がなかった方などを除いた 41,746 名について分析を行いました。対象者の平均年齢は 61.2 歳、平均追跡期間は 6.9 年間で、自殺死亡者数は 80 名でした。

体重変化について

本研究は、2006 年 12 月に実施した「大崎市市民健康調査 2006」と 2017 年 12 月に実施した「大崎市市民健康調査 2017」のデータを用いて分析を行いました。本研究では、20 歳から調査開始時点までの体重変化率を計算しました。体重変化率により、減少群（～-5%）、変化なし群（-5%～+5%）、軽度増加群（+5%～+15%）、中等度増加群（+15%～+25%）、高度増加群（+25%～）の 5 群に分類しました。

他のリスク要因の影響について

自殺に関して様々なリスク要因が知られており、さらにそれらの要因が複雑に影響しあっていると言われています。そのためこの研究では、自殺死亡に関連すると考えられる要因の影響を考慮したデータ解析を行っています。具体的には、年齢、性別、既往歴、喫煙、飲酒、教育歴、1 日の歩行時間、ソーシャルサポート、心理的苦痛などの要因について、20 歳からの体重の変化割合によって解析対象を分けた際に、偏りがなくなるように統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

この研究の結果は、一般住民を対象とした大規模調査に基づいて様々な要因の影響を考慮した解析手法から得られたものです。ただし、この研究では、体重の情報は実際に計測したものではなく自己申告であり、20 歳時点の体重については記憶が不確かな可能性があること、また体重が変化した理由についての情報がないこと、自殺死亡の直接の要因の情報がないこと、などの限界もあります。